死靈

植谷雄譯

I

東京堂書店

死靈

埴谷雄高

自序

ここにやつと序曲のみまとまつたこの作品について、その意圖を述べるつもりはない。けれども、この作品が非現實の場所を選んだ理由については一應觸れておきたい。開卷冒頭にこの世界にあり得ぬ永久運動の時計臺を掲げたのは、nowhere, nobody の場所から出發したかつたためであり、また、そのやうな小さな實驗室を設定することなしにこの作品は一歩も踏み出し得なかつたのだから。

非現實――この言葉はそれ自身多くの問題を含んでゐる。私自身の解釋によればかうである。そこは虚妄と眞實が混沌たる一つにからみあつた狹い、しかも、底知れぬ灰色の領域であつて、嚴密にいへば、世界像の新たな次元へ迫る試みが一歩を踏み出さんとしたまま、はたと停止してゐる地點である。謂はば、夢と覺醒の間に横たはる幅狹い地點である。私はかかる地點を愛する。けれども、また同時にかかる地點から一歩も踏み出し得ない自身に私は苛らだつ。私はそこから一歩も踏み出したくない。にもかかはらず、私はその一歩を踏み出さねばならない。

一種ひねくれた論理癖が私にある。胸を敲つ一つの感銘より思考をそそる一つの發想を好む馬鹿げた性癖である。極端に云へば、私にとつては凡てのものがひややかな抽象名詞に見える。勿論、そこから宇宙の涯へまで擴がるほどの優れた發想は深い感動からのみ起ることを私は知つてゐる。水面に落ちた

一つの石が次第に擴がりゆく無數の輪を描きだす音樂的な美しさを私は知つてゐる。にもかかはらず、私は出來得べくんば一つの巨大な單音、一つの凝集體、一つの發想のみを求める。もしこの宇宙の一切がそれ以上にもそれ以下にも擴がり得ぬ一つの言葉に結晶して、しかもその一語をきつぱり叫び得たとしたら——そのマラルメ的願望がたとへ一瞬たりとも私に充たされ得たとしたら、こんなだらだらと長い作品など徒らに書きつづらなくとも濟むだらう。私はひたすらその一語のみを求める。けれども、恐らくその出發點が間違つてゐる私にはその一つの言葉、その一つの宇宙的結晶體はつねに髪一筋向ふに逃げゆく影である。架空の一點である。つひに息切れした身をはたと立ち止まらせる私は、或るときは呻くがごとく咏嘆し、また或るときは限りもなく苛らだつ。そして、つひにまとまつた言葉となり得ぬ何かがそのとき棘のやうな感嘆詞となつて私から奔しり出る。卽ち、ach と pfui! 私にとつて魂より奔しり出る感情はこの二つしかなく、ただそれのみを私は亂用する。

このやうな忌むべき事態は、勿論、私個人の歪んだ能力に由來するに違ひない。と同時に、そこには私達が置かれた不幸な位置といふものもある。例へば『大審問官』を讀むとき私が肌身に覺えるのはそのやうな荒凉たる場所である。說き去り說き來つて懸河のごとく辯證する大審問官に對してキリストは最後まで默して答へない。Dixi（說き終つた）といふ言葉が吐かれたとき、キリストははじめて永年の霜を置いたやうな大審問官の唇にぴくりと接吻する。偉大なる憂愁につつまれた大審問官の魂がそのとき雷擊をうけたやうに震撼する。その魂は確かに震撼せざるを得ない。何故ならキリストの無言の接吻のなかには瞑想と殉敎と流血に積み上げられた數千年の歷史が結晶してゐるのだから。そして、そのと

き、私達は知る、『大審問官』の作者の苦惱が如何に深く强烈なものであれ、彼はなほ（私達と較べてより强烈に幸福なことには）腕をうちおろせばかちんと敲ちあたつてはねかへる數千年の堅固な實體の上に支へられてゐることを。もしこの私達が一つの底知れぬ重味をもつて沈默しつづけるキリストを描くとすれば、その作品中に數千年にわたつて積み上げられた歷史をも創り出してみせねばならない。それは疑ひもなく不可能である。私達は巨大な幅廣い人類史のなかに投げこまれた一匹の哀れな鼠のごとくにデモクリトスからヘェゲルへ至るまでの厖大な積荷の間をちよこちよこ嚙り歩いた。けれども、一つの積荷からぼろくずをひきずりだすごとくに忽慌とつつ走り、一つまみの斷片のみを口に含んで踊つた私達はいまだにその一つ一つの味を詳らかにせぬ。私達はちやちなソクラテスであると同時にちやちなソフィストの徒であり、一瞬合理的でまた一瞬非合理的で——要するに單純素朴なてんやわんやなのであつて、一貫せる論理的思考の持續にはたうてい耐へ得られぬといふのが私達の精神の位置である。けれども、私達の不幸は私達が嚴然確固たる實體の上に立脚してゐないことなのではない。もし私達が風のごとき氣分のみにまかせる單なるてんやわんやの徒であるならば、そこにはまた不幸な事態も幸福な境地も何ら問題になり得ないだらう。私達にとつての不幸は、私達がその發想を最後までつきつめ得ぬてんやわんやの徒であるにもかかはらず、なほ私達に一定の受容能力が備つてゐるといふ一點にある。大審問官の論證を自ら築き得ぬにもかかはらず、その偉大なる憂愁はその皮膚に感得される——これが私達を未來へひきずりゆく不幸である。

それは前へひきずりゆく不幸である。苦難な未來へ踏み出さなければならぬ不幸である。たうてい動

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かし得ぬ手足をなほ動かさなければならぬ不幸である。私個人について云へば、私は『大審問官』の作者から、文學が一つの形而上學たり得ることを學んだ。そして、その瞬間から彼に睨まれたと云ひ得る。私は彼の酷しい眼を感ずる。絶えざる彼の監視を私は感ずる。ただその作品を讀んだといふだけで私は彼への無限の責任を感ぜざるを得ないのである。それは如何に耐へがたい責任であることだらう、たうてい不可能な一歩をしかも踏み出さねばならぬといふことは。私はつひにせめて一つの觀念小説なりともでつち上げねばならぬと思ひ至つた。やけのやんぱちである。けれども、その無暴な試みの如何に羸弱なことであるだらう。例へば、私がこの作品中に扱つた《虚體》といふ馬鹿げた觀念をとり出してみてもよい。この僅か一語に到達するためには、私には私なりの苦勞がなかつた譯ではない。けれども、ひとたびその語が白紙の上に書き下されてしまへば、それは他のさまざまな觀念のなかに泡のごとく消え失せてしまつてもはや跡形もない。微風のなかに搖れてゐる一本の枯れた樹ほどの持續する表現力も持ち得ないのである。重味なき觀念のもろさである。とはいへ、私はその脆い碎けた場所から出發せねばならない。

このやうな荒凉たる場所に置かれたとき先人達が如何なる方法をとつたかを見たとき、私には一つの姿勢が目にとまつた。そこにはさまざまな型があり、或るものはそこで地上に密着する蘚苔植物的に生きのびてゐたが、或るものははじめから枯死の擬態をとつて立つてゐた。擬態——さうである。特殊な風土のなかにとにかく一本の樹幹を延ばした形で立つてゐるその姿勢に擬態といふ名稱を附して恐らく誤りではないだらう。死んだ眞似でもしてゐなければたうてい自身が持ちきれなかつた彼等の精神に深

い興味を覺えたばかりでなく、遺憾なことには、私はさうした姿勢に親近性のみ感じた。さうである。それは遺憾な親近性であつた。何故ならベェコンによつて既に數世紀前に擊破された洞窟の偶像がなほ私達の裡にとぐろを捲いてゐるのを私は感じたから。けれども、といふことはまた同時に、うまく死んだふりをしてみせる隱れ簑を私自身たとへ神の目を盜んででも案出すべきやけのやんぱちな衝動を感じたといふこととともまつたく同じことであつた。その遺憾なやけのやんぱち的心情の分析にはここではたちいる必要もない。私が敢へてここで觸れたいのはその結末の姿勢だけである。その結果、私がとつたのは次の三つの方法なのであつた。卽ち、極端化と曖昧化と神祕化——。

前述したごとく私には一種ひねくれた論理癖がある。せめて徹底出來るところまで踏みこみたい。もし不可能ならば、ごまかしてでも通りぬけたい。ごまかしが見拔かれてもなんとか灰色のヴェールをかぶせておけ。以上が私を支へてゐる體系である。こんなたよりない中世の呪術的方程式に從つてとにかく私流の一貫性を保つてゐるのが、私の示し得る唯一の姿勢なのであつた。明晰と嚴密——いまだ私の精神を飾つてゐないその協和音を渴し求めてゐない譯ではないけれども。この場合、あとに並べられた二つの方法は謂はば比較的單純な擬態法であつて殆んど說明を要しない。つまり、作中隨所に見られるごとく、als ob の濫用、反覆の濫用、或る期間までの心理描寫の省略、探偵小說的構成等々々。けれども、第一にとりあげられた極端化の方法については、非現實の場所をこの作品が出發する場所と述べた以上その大要を說明しておかねばならぬ。一般的にいつて、思考は本來事物の根源と極限へまでひたすら辿りゆくものであるから、敢へて極端化と呼ばずとも、思考本來の道行きをそのまま辿りゆけば、

屢々、いはゆる思考實驗（ダンケンシン・エキスペリメント）の領域へまで踏みこむに至るのだらう。私のひそかな願望はかかる實驗をここで行ひたいといふことのみにかかつてゐる。けれども、ひねくれたちやちな論理癖しかもたぬ私はただ私流の極端化の原則を歪んだ形で貫ぬくばかりである。屢々私が行ふそれは、もしさういつてよければ、妄想實驗（ガアーン・エキスペリメント）の領域に屬すると規定して好い類のものである。さうである。そして、それはそれ以外の何物でもない。そして、このやうな愚かしき無力な實驗遂行の故にこそ非現實の場所から私は出發しなければならなかつたのである。

嘗て耆那教の聖典に接したとき、私には一つの奇妙なヴィジョンが浮んだ。耆那教とは印度古來より現在までもひきつづいてゐる戒律酷しい一教團であつて、嘗て私が述べるやうな事實など存しなかつたが、私は私自身の法則に從つてその素朴な教儀を私流の領域へまで極端化してみたのである。そのとき浮び上つてきたヴィジョンとはかうである。その教團はその頃餓死教團といはれてゐた。着ること飲むこと食ふことはおろか呼吸すらその信徒達は禁ぜられてゐた。從つて、教團の信徒達が集り籠つてゐる或る高山へ登りゆくと、その途上の此處彼處にミイラ化し或ひは風化したひとびとの屍體が無數に見受けられた。けれども、如何なる理由によるのか、該教團の始祖大雄のみは深く暗い洞窟の奥にその瞑想的な眼を光らせて生きてゐた。菩提樹の下で釋迦が正覺し無窮の碧空を眺めあげたとき、ふと想ひ出したのがこの大雄である。（事實に於いては彼等の年代は遺憾ながらややずれてゐて彼等は互ひに相知らなかつたが、私の極端化の法則はここでも時間的、空間的な事實の拘束など無視する。）ヒマラヤに似た美しい白い雪をかむつたその高山へ辿り着いた釋迦は深く暗い洞窟のなかへ大雄の前まで靜かに進んでゆ

く……。これが私のヴィジョンの出發點である。この釋迦と大雄の對話の章は作中人物が語る一つの物語としてこの作品の最後近く現はれる筈であつて、この作品全體の觀念の中心をなしてゐる。この作品が非現實の場所から出發するといふとき、その設定には、登上人物達がフィルムの陰畫のごとく暗く處理されるといふ意味も含められてゐるのであるが、かかるネガティヴな作中人物達の中心に坐つてゐるのが全否定者大雄なのであつて、彼等は彼の觀念の部分をそれぞれ擔つて歩いてゐるに過ぎない。

さて、さうであるとして――。

宇宙の涯から涯へまで響きゆく一つの巨大な單音の幅を檢證すること、それは確かに一つのヴィジョンに他なるまい。それは確かにあらゆる先人達をひきずり歩ませた一つの光源に他なるまい。けれども、もしこの光榮ある用語があまりに暗過ぎる私の領域に似合はしからぬとすれば、私は私自身の用語をもつて、それを一つの架空凝視と名づけても好いのである。私の魂は、廣大な眞空の一點にはたと立ち止まる。私は、架空を凝視する。そして、そこに行はれる一種の精神の體操、私はここに設定された小さな實驗室がもつ意味をそれ以上に豫定してゐない。巨大なサイクロトンやダイナモが旋回する現代、もののしいランビキやフラスコをごたごたと並べたてて效果零の古ぼけた錬金術にとりかかつた以上、その他につけ加へるべき意味などあり得ないのである。

私が本卷を序曲と呼ぶ理由は、てんやわんやの息切れする能力をもつてとにかく三つの主導音をここに敲つたといふだけの理由である。第一から第三主題の展開へいたるまで。だが、まだ何事もはじまつてゐないのである。この作品が扱ふのは五日間の出來事であるが、だらだらと長いスタイルで書きつづ

けてゐるため、この序曲を終つてやうやく第一日目の夕方まで達したに過ぎない。徹夜など氣にもかけず飛びまはりたがる作中人物達の氣配を窺ひ看るとき、前途の遙かさにいささか恐慌の情を禁じ得ない。

死

靈

第一卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

惡意と深淵の間に彷徨ひつつ
宇宙のごとく
私語する死靈達

一

最近の記錄には嘗て存在しなかつたと云はれるほどの激しい、不氣味な暑氣がつづき、そのため、自然的にも社會的にも不吉な事件が相次いで起つた或る夏も終りの或る曇つた、蒸暑い日の午前、××風癲病院の古風な正門を、一人の痩せぎすな長身の青年が通り過ぎた。

青年は、廣い柱廊風な玄關の敷石を昇りかけて、ふと立ち止つた。人影もなく靜謐な寂寥たる構内へ澄んだ響きをたてて、高い塔の頂上にある古風な大時計が時を打ちはじめた。青年は凝つと塔を眺めあげた。その大時計はかなり風變りなものであつた。石造の四角な枠に圍まれた大時計の文字盤には、ラテン數字でなく、一種の繪模樣が描かれてゐた。注意深く觀察してみるならば、それは東洋に於ける優れた時の象徴――十二支の獸の形をとつてゐることが明らかになつた。青年は暫くその異風な大時計を眺めたのち、玄關から廊下へすり抜けて行つた。

この青年、三輪與志が郊外にある××風癲病院を數度にわたつて訪れなければならなくなつた用件と云ふのは、彼の嘗ての親友で、またその後、兄の知人ともなつたらしい或る不幸な、孤獨な精神病者の委託についてであつた。幸ひなことに、この病院に勤務してゐる一人の若い醫師が、三輪與志の兄三輪高志の學生時代の顔見知りであつたので、患者の委託についてさまざまな便宜をはかつてくれたばかり

でなく、進んで患者の擔任をすらひき受けてくれたのであつた。

その不幸な精神病者は、やはり郊外にある或る刑務所のなかで、不明瞭な原因から急に狂氣の徴候を表示したと云ふのである。狂氣の徴候を表はしたと云つても、見廻りの看手に發作的な暴行を加へたとか、なにか妄想に憑かれて曖昧な言葉を述べはじめたと云ふ譯ではなかつた。昔から默りがちな青年であつたが、その刑務所へ送置されてから次第に深い沈鬱狀態に陷り、遂に全くの無言狀態をつづけるに至つたと云はれてゐる。それは一種の言語喪失の症狀なのであるが、通常の健康狀態を保つてゐた以前から沈默がちなもの靜かな青年であつただけに、何時頃から彼を發狂者として認定すべきか、書類作製に際して擔當係員も少なからず困惑したとのことであつた。

彼の狂氣がはじめて問題になつたのは、或る蒸し暑い日の午後、溫厚な人格者であると評判されてゐたかなり老人の刑務所長が未決囚達の房を各個に見廻つて、暑さへ向つての健康について二三の注意を與へ、未決囚達の獨居生活を元氣づけて歩いた際、彼がその老所長に對して失禮な振舞ひをしたことから端を發したと云はれてゐた。然し、溫情をその全生涯の標語としてきたと云ふ老所長を無視したやうな粗暴な言動が示されたのではなく、老所長が獨房內に端座してゐる彼に丁寧に話しかけたとき異常に囁ひはじめただけだと云ふ話もあつた。しかも、この停年前の老刑務所長はあまりに穩やかすぎてなにかしらからかつてみたくもなる人物だとの噂も他方にあり、彼は默つたまま奇怪な樣子で嚇しつけたのだと、眞實らしく述べる者もあつた。

これらの話は、三輪與志が、假釋放される兄の荷物を待合室まで運んできた雜役夫達から聞いたので

ある。とにかく老所長の訪問に際して事件があつたことだけは確かであつた。老所長は直ちに擔當看手を呼びつけ、このやうな狀態に至るまで無責任に放置しておいた怠慢振りを叱つたさうである。三輪與志が看手長から聞いた話によると、老所長はその場から自ら醫務室へ赴いて、『國家から保護を委託されてゐる大切な人物』について、醫師達と心からなる相談をこらしたとのことである。醫師達の診察が行はれると、しかし奇妙なことに、一人の醫師が、彼には失語症の傾向もまた重い氣鬱症の徵候も認められず、全體としてなんら發狂の症狀はないと、强硬に主張したさうである。それだのに、如何なる理由でか、彼はやがて刑務所內の一病舍へ移管されたのであつた。一年以上の長い期間其處へ放置されてゐたのであるが、彼がその病舍でいかなる扱ひを受けてゐたかは明らかでない。

此處で注意して置かねばならぬことは、やはりその同一病舍に病臥してゐた三輪與志の兄三輪高志が、病狀の進行の結果、執行停止となり假釋放されたのが、不幸な精神病者、矢場徹吾がその病舍へ送られてゐたその期間內であつたと云ふことである。

さて、三輪與志と矢場徹吾の關係について一寸說明しておかう。

矢場徹吾が高等學校を去つた理由には、稍々不明瞭なものがあつた。學校當局がその事件に對し處置した決定は恐らく正當であつたらうが、失踪に際しての矢場徹吾の心理が說明しがたいものであつた。

或る秋の午後であつた。町から學校の寄宿舍への歸途、黃ばんだ葉々をつけた樹々の密生してゐる公園の境にさしかかつて、三輪與志と矢場徹吾はふと佇んだ。動物がそれによつてなりたつてゐるやうな氣味惡く訴へる低い、地を這ふやうな締めつけるやうな、唸り聲が公園のなかから聞えてきた。二人は

重苦しく顔を見合はせると、既にかなりの人々が足を止め、粗らな圓をつくつてゐるその場へ近づいて行つた。

クレチン病を患つて畸形に發達した子供にこんな風貌があると云はれる。一瞥しただけで、奇怪な印象を受ける子供であつた。頭から眼、鼻、口、さらに軀幹と、その凡てが正常な釣合ひがとれぬと云ふより各自がそれ自身の奇怪な個性をもつて勝手に發達しきつたふうに見える……。愚鈍と一瞬にして深く印象されるが、それにしてもなにか厭らしい不氣味な後味がそこに殘つた。そんな子供が一匹の大きな尨犬をむごく扱つてゐるのであつた。

まだ六つ位にしか見えなかつたが、痙攣するやうな激しい力で、殆んど自身と同じ背丈の大きな尨犬の耳をひつぱつてゐた。その子供は苔のたまつた白つぽい舌を垂れてゐた。そして、尨犬の苦しげな唸り聲が奔しるやうな悲鳴へ高まると踊り上つて嬉しげにその兩足を踏みしめた。そんなとき、その子供の鈍い瞳は生き生きと光つてさへ見えた。哀れな尨犬の哀れな耳朶は、ちぎれるばかりに張りつめられてゐた。しかも、耳朶の上部に赤黑い皮膚病のかさぶたが一つの乾いた隆起を形造り、哀れな尨犬の窶れた風體を、さらに悲慘にしてゐた。その尨犬は、このやうな苛酷な扱ひに日頃から慣らされてゐるのか、何時までも、凝つと身動きもせずに竦み立つてゐた。然し、激しい苦痛にはやはり耐へきれなかつたのである。首を前方へ持ちあげ悲しげにしばたたかせる乳白の瞳が霑んでくると——大粒の涙が湧き出てきた。……その表情の推移は、殆んど一人のうちひしがれた人間の激しい苦惱を聯想させた。

すると、事態が變つた。閃くやうに子供の傍らへ進みよると、氣味惡げに眺めてゐる人々があつと云

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com